

【解答例1】

問1

大学での学びにおいて古典的な考え方は文章①のような、大学は職業教育の場ではないというものである。確かに、大学が純粋な研究機関であり、そこに参加する者は学問の世界に身を投じるという前提が成立していた場合は、大学は有能で教養ある人間を育成すればよかった。だが、現代では大学は大衆化し、多くの人々が大学に進学し、そして、卒業後は文章②が述べるようなビジネスの世界に入るものが大半である。

そのような時代の変化を受けて大学での学びも変化しなくてはならない。むしろ、時代が変化しても大学での学びの目的は教養を身に付けることであり、それが時代を超えた大学の普遍的なあり方だとする意見もあるだろう。しかしながら大学での学びを世俗から切り離し、神聖化することは文章④が読書義務と呼ぶ、本の神聖化と通じるものがある。教養人とは読むべき本をどれだけ読んでいて評価される。文章③が述べるように良書を深く何度も読むことが大学での学びの中心になる。だが、大衆化した大学では教養人を養成するだけでなく、文章②が主張するように、実社会でのニーズに合った人材、経済界などから要請される人材の育成もまた重要である。近年ではデータサイエンスなど実学的なカリキュラムも大学では増えているが、大学では古典的な教養が重視され、実学が軽視される傾向が根強い。実学を重視した時代に合った大学での学びを模索すべきだ。

問2

(ア)

社会的問題について最良の解決を導く「専門知」と部分最適を避け、多角的な視点や俯瞰的な視点を支える知的交流が社会における「知」のあり方として重要である。

(イ)

文章②にある日本の競争力を高めるための Society 5.0 や持続可能な社会を実現するSDGs に関する政策は日本のみならず、世界各国で最重要となる課題である。この課題解決のために必要な「専門知」の育成において大学が必ずしも成功しているとは言えない。

その原因の一つが大学でのリベラルアーツ教育にある。リベラルアーツ教育については、「人文学、社会科学、自然科学にわたる学問分野を学ぶことを通じて、論理的思考力と規範的判断力を磨き、課題発見・解決や社会システム構想・設計などのための基礎力を身に付けること」と定義されている。しかしながら、大学でのリベラルアーツ教育は文章③が述べるような古典的な良書を熟読し、知識を増やすことに重きが置かれている。それは文章④が述べるように、神聖とされる本を読まないことへの罪悪感ゆえである。そのような古典への傾倒が大きくなればなるほど、文章②が述べる経済界のニーズが高いデジタルに精通した人材やグローバル人材、グリーン人材などを育成することは軽薄なものだとされる。古典的な教養教育が不要というのではないが、古典的な教養教育が現代に求められる問題発見・問題解決能力のための基礎力の育成とどのように関連付けられるのか明確な答えがないままに、リベラルアーツ教育を推進していることの弊害である。古典的な教養を身に付けることで問題解決能力が向上するという思い込みだけで、エビデンスによる検証もなく古典的な教養が重要だとすることに問題がある。良書を熟読し、自らの思想体系を確立することは大学教育において重要ではあるが、リベラルアーツ教育についてエビデンスに基づく教育効果の検証と実学的なリテラシーとの具体的な架橋を行うことに力を入れるべきである。これは大学だけの問題ではなく、人材の育成について STEAM 教育やリベラルアーツ教育という形だけで、内実を精査しない経済界の問題でもある。

【解答例 2】

問 1

文章②にある Society5.0 では、デジタル技術や環境技術を様々な分野に応用し、実装しなければならない。その際、多様な組織や社会集団との連携も必要となる。これを可能とするのは、文章①にある「有能で教養ある人間」である。そうした人材は「一つの学問あるいは研究のみに没頭する」学び方では育たない。専門的知識を学ぶと共に、一般的知識、多様な分野の教養を身につけなければならない。文章②を見ると、企業も Society5.0 において「文系・理系の枠を超えた知識・教養」が重要と考えている。文章②で重視される STEAM 教育やリベラルアーツも、特定分野に縛られない学びが特徴だ。

とはいえ、闇雲に幅広い分野を学べばよいわけではない。文章④には「ある本についての確に語ろうとするなら、時によってそれを全部は読んでいないほうが良い」という一節がある。大袈裟な表現になってはいるが、自分の興味や関心という軸を持って学ばなければ、知識を自分のものとし、活用する力を持ちえないことを示唆している。文章③でも「自分の思想体系や目的に合う」知識のみが身体に残ることが指摘されている。また、文章③では、学んだ内容について自ら「反芻し、考える」ことの重要性も指摘されている。これも大学における学びの重要な側面だ。自分の興味関心を軸に学んだ内容を、相互に結びつけることで、文章①にある「詳細な知識と一般的な知識の結合」を実現すべきだ。

問 2

(ア)

主体的に考えて、領域を横断し、多様な知識・技術を組み合わせる。

(イ)

Society5.0 を実現し、山積する現代の社会課題を解決するには、自己の専門領域にとどまらず、主体的に多様な人や組織と連携し、多様な知識や技術を組み合わせ活用していく知が重要となる。たとえば、日本で新型コロナウイルスの感染が拡大した際、大学の医療データサイエンティストと厚生労働省、SNS 企業の LINE が協力し、LINE 利用者を対象にした健康状態の調査を行った。調査では年齢や性別、住んでいる地域に関するデータも集められたが、個人が特定されない統計処理が施された。厚生労働省は提供されたデータを基にクラスターの発地域を把握、感染拡大防止策の策定に活用した。医療データサイエンティストは感染症の専門家ではないが、コロナの市中感染拡大という事態を予見し、それに対応する方法を主体的に考えた。それが多様な組織の知識・技術を組み合わせ、感染状況の実態調査の実現に繋がった。こうした構想は、文章③にある「自分の思想体系や目的」を軸に、主体的に考えることなしには生み出しえない。また、構想を現実的なものとするためには、社会の幅広い領域についての知識や教養を持っていることも重要だ。

もう一つの例としてデンマークを挙げる。行政システムのデジタル化が進み、オンライン上で様々な公的サービスが提供され、市民の 9 割近くが利用している国だ。DX が成功した背景には、中央政府、地方自治体、病院、公立学校、大学といった諸機関が縦割りを超えて連携したことがある。IT 技術者や公的機関の関係者たちが、公的サービスを利用する国民の目線に立ち、「ユーザーの利便性向上と行政の効率性の両立」という共通の目標に向けて、自分たちの専門知を組み合わせ活用したのだ。このように、領域を横断して知識・技術を組み合わせ活用する知を持った人材が協力することで、21 世紀の社会における課題解決が実現する。

【解答例3】

問1

大学での学びで重要なのは(1)長期的視野に立って(2)専門と言える分野を持ちながらも学問横断的に学び(3)アウトプットを前提として知識をインプットすることを心がけ(4)自分だけでなく人々が well-being を得られる社会づくりを構想できる知を(5)楽しみながら得ることだ。文章②が人生100年時代を視野に入れた学びの必要性を主張している点は(1)との関連で賛同できる。また、文章②と③が学際的な学びの重要性を指摘している点は(2)との関連で賛同する。ただ、文章②は全知識の体系化を主張するが、学問が高度に細分化した今日、それは不可能だ。広範囲に学ぶことも大事だが、自分なりの問題関心や楽しみから自分独自の知識の地図を作成することを主眼とすべきだ。

また、資料③がリカレント教育や well-being をあげているのは賛同できるとしても、人的資本の形成という経済的価値に重きを置きすぎている点は、(4)との関連で賛同できない。学びはよりよい人生を送れるようにするためにこそ行うべきで、(3)の学びのアウトプットも仕事に限らない。また、文章④は、特権的な知識人の世界だからネタにできる話に過ぎない。日本の社会人が他国と比べて驚くほど勉強をしないことが話題になっているが、無知に居直る反知性主義が日本人に蔓延しているのは、無味乾燥な受験のための勉強に明け暮れた後、(5)の学びの楽しさを得られなかったからではないか。

問2

(ア)

知の重要な役割とは、人々の well-being を向上させることのできる社会構想やそれを実現する社会イノベーションを生み出す力となることである。

(イ)

AI 革命が進む中、雇用の不安定化が懸念されている。官民を挙げて第4次産業革命を推進するドイツでは、(ア)の知を活かしていると言える、社会構想を伴った労働4.0が進められている。第4次産業革命により高まる失業その他のリスクに対して、労働者の自由を拡大しながら、労働市場に順応し、よりよい人生設計を行えるようにする政策だ。特に目を引くのが、「不平等や格差を最小にするための制度改正」「各人の就労能力を生涯にわたり発展・安定させるための教育・訓練支援」などを行う必要を強調している点である。そして、世代間の不平等を是正するとともに起業を促す観点から、全ての若者に全職業人生にわたって利用できる資金を給付する個人就業口座を含んでいる点である。用途は限られてはいるものの、若者はこの資金を自分の人生設計に従って起業に使ってもよいし、スキルアップに使ってもよいし、充電期間に使ってもよいのである。

日本政府が進めるリスクリング政策も労働移動円滑化という点では、ドイツの労働4.0と重なる所がある。だが、その支援の柱にはリスクリング支援の3本柱として①転職・副業を受け入れる企業や非正規雇用を正規に転換する企業への支援②在職者のリスクリングから転職までを一括支援③従業員を訓練する企業への補助拡充が掲げられているが、賃上げや転職以外に目指すべき方向を示す社会の構想やそれを実現する施策が欠けている。

(ア)の知を欠いているという他ない。賃上げも重要であるが、リスクリングが人々の well-being の向上につながっていくためには切れ目のない支援や、生涯にわたる支援、格差や不平等を失くすといった観点が必要となる。それを欠いたリスクリング政策は、何もしないよりまだよいが、文章④が揶揄している、実際にはきちんと学んでいないのに学んでいるふりをするに長けた人々を量産することに終わりがねない。

【解答例 4】

問 1

諸科学が短期間で長足の進歩を遂げる現代において、①が述べる知識の体系化はますます重要になっているのではないか。大学を卒業して社会人となり、各自が職場においてすぐに役立てられそうな実践的な最新の知識を習得したところで、それらは遅かれ早かれ陳腐化してしまう。そもそも誰もが大学で専攻した知識を生かす職業に就くわけではない。それゆえ、どのような知識を必要とする職業に就こうとも、それらに対応して自らアップデートしていけるような視角や基礎的な教養を大学で身につけておくべきだろう。

それは、②においても「学び続ける力」として言及されている。さらに、自助努力の限界を踏まえて、産官学連携のリカレント教育の重要性を謳うのも妥当な方向性である。ただし、経済界の要望だけに、かつてのOJTの役割を大学に期待するあまり、大学のキャパシティを過大に見積もっている。従来の大学制度の大幅な改編を前提とするだろう。

また、デジタル化されていく社会においても、読書が学びにとり不可欠の行為であることは変わりがない。③は最新刊よりも良書を読むことを勧めるが、今の時代ではアップデートは必須であるから、古典から電子書籍を含む最新刊に至るまで良書を求める必要がある。そして、良書の判断こそ知識の体系を必要とする。大学での学びは、人生100年時代を生きていく際に様々なフェーズで必要とされる指針の獲得に重きを置きたい。

問 2

(ア)

現代社会で発生する現象に対応できる、必要十分な情報の獲得と理解の前提となる知。

(イ)

高度情報化社会の到来により、あらゆる情報へのアクセスが瞬時に可能になったのと同時に、簡便に得られる情報の絶対量が人間の処理能力をはるかに越えてしまった。どれだけ情報を収集しても際限がなく、しかも理解できるとは限らないのが現代社会である。

最近の事例を挙げるなら、コロナウィルス感染対策が象徴的であろう。ワクチン接種の効能や副反応についても知っておく必要がある。官製の情報では、責任回避のために効能の限界や副反応の可能性が言及され、政府は相応の説明責任を全うしているが、それらを最終的にどう判断するかは自己責任である。恐らく正解もないのだろう。

内田百閒の『山高帽子』に「スペイン風邪」の大流行の様子が描かれている。コロナを凌駕する犠牲者を出したインフルエンザのパンデミックが描かれているが、それを読んでも具体的な処方箋が見つかるわけではない。しかし、良書から当時の人々の行動や心理状態を知ること、現代の我々も参考になることがある。現代に比べて低い医療水準やそれに関する人々の知識のなさが、かえって人間の性というものを浮き彫りにするからだ。

また、ロシア軍のウクライナ侵攻が発生し1年が経過しても紛争解決の方向性すら見えない。ロシアはこの侵攻を「特別軍事作戦」と自ら位置づけている。戦争には大義名分を必要とすることを歴史から学んではいるが、戦争の理不尽さは理解していない。

ロシア人でトルストイの『戦争と平和』で描かれる戦争の悲惨さを知らない者はいないだろう。ましてや政策立案者ならば、戦争を躊躇する感性や教養を学んでいるべきだ。

同じことは二度と起こらないので過去から学ぶことはないと考え人が多いのだろう。だが、人間が考えることは昔から大差ないことを良書から知るとその普遍的な価値を理解できる。そして、同じ過ちを繰り返さないことが人類の英知であることが自明となる。